

「私の暮らし」

皆さんは毎日、家族と暮らしていて、幸せだと感じたことはありますか？

ほとんどの人は、それは当たり前のことで、毎日幸せだと感じているかどうかは、意識しているかどうかの違いくらいだと思います。家族と一緒にご飯を食べたり、出かけたり、笑ったりと毎日、家族と暮らしている人が多いです。

ですが、私はそのような幸せを感じることはできません。なぜなら、私は家族と長い間会っていないからです。私と同じように家族と会えず、たくさん子どもたちが児童養護施設へと預けられています。児童養護施設とは、保護者がいない子どもや、様々な理由で保護者と暮らすことができない子どもを養護するところです。

私が児童養護施設「睦の家」に暮らすことになったのは四歳の頃でした。児童養護施設に暮らす前は、兄二人、姉二人、弟一人、私と両親の計8人の大家族でとても幸せに暮らしていました。ところが、私が一歳の頃に母が重い病気にかかってしまいました。母が重い病気にかかってから、父一人で会社に行けず、母の看病をしながら五人の子供を育てていました。ですが、育てることに限界があり、まだ幼い私と弟は睦の家という児童養護施設に預けられました。十年前ぐらいのことなので、私には家族との記憶がほとんどありません。

「睦の家」に住むようになった最初の頃、家族に会いたくて、不安ばかりでたくさん子どもたちと同じように、ずっと泣いていました。いつか迎えに来てくれると思い、ずっと窓から外を眺めたり、時には外に飛び出したりしたこともありました。そういうとき、施設の先生方は母親のように接してくれました。どんな時でも側にいてくれました。揺れ動く心をしっかり受け止めてもらい、その時、その時を乗り越えていくことができました。簡単な言葉ですが、嬉しかったです。私はこうして安心して暮らすことができます。睦の家に暮らしている、他の子と仲良くなり、遊んだり、時には喧嘩もしたりしますがとても楽しく過ごすことができます。

そんな中、私が小学四年生の時に、同級生の子に「睦っていいなあ。親がいないから親と喧嘩せずに住むし、私も住みたい。」と言われたことがありました。私は周りからそんな風に思われていたのを聞いて、とてもびっくりしました。「好きで施設に暮らしてないのに…家族から離れるという気持ちがわかっていない！」と思いました。でも、周りから見れば、自分たちと同じように学校に通い、勉強道具もそろえられ、お茶やお弁当も持たせてもらい、何不自由なく暮らしているように見える私たちを、そんな風に思われても当然だなあと、今は思います。それでも、心のどこかで睦の家で生活する私たちのことをちゃんと知って欲しいと思っています。

そんな中、一学期の終わりに野村恵子先生のお話を伺いました。今まで「睦っていいよなあ。私も住みたい。」と言われるたび、みんなは養護施設の子の気持ちも分かってくれないと思っていました。しかし、野村先生の講演会で「自分を生んでくれてありがとう」と母への感謝の気持ちでいっぱいになりました。母は私が6歳の時に、亡くなっています。私はずっと「私が生まれたから、母が亡くなってしまった」と思い、ずっと自分のことが嫌いでした。しかし施設の先生方はその心を癒し、私だけでなく、傷ついたりいろんな子どもたちに、親のように接してくれ、いつの間にかみんな家族のように思うことができるようになりました。

そして周囲が養護施設のことを理解してくれない…のではなく、私が理解してもらえるように一生懸命頑張ろうと思うようになりました。中学三年生、進路を見つめ、自分ができることを探していきたいです。今まで育ててくださった睦の先生に感謝しています。そして天国にいる母に「いつも頑張っているね！」と見守っていてほしいです。

十五歳、私がみんなに伝えたいこと

夏休みが近づいた七月、税務所からゲストティチャーが来られて、租税教室が行われました。その話の中で私の心に残ったのが、税の使われ方についてでした。税には福祉に関係するものが多く、今、私が生活している児童養護施設もその一つです。その時、私は世間での児童養護施設の見方が気になり、帰宅してから調べてみました。するとよく出てきたのは「かわいそう」という言葉でした。そこで思ったこと・・・ 私はかわいそうな人なののでしょうか。

私は生まれて十日で乳児院に入りました。乳児院とは就学前までの乳児を入所対象としています。生まれて十日で入ったことを知ったのはつい最近のことです。聞いた人は乳児院のときからお世話になっている人からです。乳児院にいた頃の記憶はありませんが、物心ついた時から一カ月に一度、大阪から会いにきてくださっています。一カ月に一回でも家族よりも過ごした時間が長く、とてもよくしてくださっています。夏には暑中見舞いを、冬には年賀状、そして私の誕生日には手紙とプレゼントを贈ってくださいます。乳児院にいた時の様子をとても笑顔で話してくれる姿を見ていると、私をこんなにも大切にしてくださる方がいることを幸せに感じます。

またこれまでお世話になった里親さん達からも多くの愛を受けています。私がお世話になっている里親さんは、季節里親と言い、主に長期休みなどにお世話になることが多いです。私が里親さん宅に行ったのは、小学一年生の時でした。里親家庭を経験するのが初めてで、私がとても緊張していると、気軽に話しかけてくださり、私のペースをとても大切に接してくださいました。今でも印象に強く残っています。他にも五つの家庭の方々と出会い、私が少しでも普通の家庭に触れることができるよう、様々な工夫をして迎えてくださいました。キリスト教のご家庭や警察官のご家庭、養子縁組をされた子どもさんがいるご家庭など、それぞれの特長があり、とてもいい体験をすることができました。私は本当の家庭の記憶はありません。それでも、たくさんの温かい経験をしました。その愛される経験として、一番長く、そして一番近くで支えてくれている施設の職員の先生方と、共に生活をする子どもたちがいます。私の記憶では、施設の生活しかないぐらい長く生活しています。今の施設が創立された年が平成二十五年なので、そこから計算すると十一年経っています。その十一年の中で出会いもあり、別れもありました。私と同じ年に入り、同い年の子もいます。入った時の記憶もあまり覚えていませんが、とても長い年月を過ごしています。当然、子どもと子どもの間や、職員と子どもの間で、合う、合わないはあると思います。ですが、お互いが改善しあってうまく生活していると思います。失くしたものがあ、声をかけるとみんなで探してくれるし、いろんなジャンルの好きを共有することもあります。一方で、靴下が混ざってしまい、次の日、学校に行く時、自分の靴下がなく困ることもあります。そして、他の人の靴下を私も使ってしまうので、負のループが今も続いています。そんなことでも笑いあえる仲がとても温かく、好きです。職員の先生は親しみを込めてニックネームで呼ぶことが多く、子どもと職員の関係がより近い形で、毎日過ごしています。イライラしていて強く当たってしまう時もあります。でも、これが必要だと言ったらすぐに用意してくださるし、学校からの配付物で保護者が書くコメント欄には、次の日にきちんと書いてくださっています。自分が生活できているのは、こういった支えがあるからこそ成り立つもので、それが当たり前になりすぎてあまり感謝を伝えられていないと思うことがあります。日頃から、言えるように心がけたいと思っています。

このように沢山の人から愛されている私は、「かわいそう」なののでしょうか。施設で生活していて、辛いことがゼロというわけではありません。それでも私は、力強く生きています。これから私達を「かわいそうだ」と思っている人に出会うかもしれません。その時、そういった考えを変えられるような人になりたいです。今の自分にできることは、施設での生活について知ってもらうことです。知ってもらうことで、少しでも施設で生活する子どもたちについて、理解してもらいたいです。私はこのまま力強く生きて、今度は支える側になりたいです。